

【 一 般 の 部 】

最優秀賞 通りを歩くこと、通りを守ること

京都市北区 清水 雄斗さん

このマンガは、私たち読者に対して、主に小学生の歩美の視点から「通りを歩くこと」について考える機会を与えてくれました。そして、大学生である私にとって、このマンガでは今までの通りとの向き合い方を反省するとともに、「通りを守ること」を強く意識させてくれました。

京都に住んでいる私はどちらかというと、6 頁に出てくる若者のように、自転車で早いスピードを出して通りを走行する機会が多いです。しかし、そのような行為は通りを歩く人にとって迷惑であり、そして自転車を運転する人、車を運転する人は通りを単なる通過空間ととらえているので歩く人たちの迷惑だと思う気持ちに気づいていません。私も、このマンガを読むまでは通りを単なる通過空間だととらえており、通りを歩く人たちに迷惑をかけていたかもしれないと深く反省しました。

また、マンガの中では、通りを歩く人が快適に歩くことができるための工夫が紹介されていました。特に、宅急便の時間指定を利用して、再配達による交通量増加を防止するため荷物を確実に受け取ることができるようにしておくという工夫が印象深く思いました。配達をする方にとっても利益になるので、自分も提供されているサービスを積極的に利用しようと思いました。

このマンガに紹介されている方法以外にも、安全に通りを歩くことができるためにできることを考えることができると思います。これは、大学生や京都市内で働く人たちに求められる役割です。そして、主に通りを歩く機会の多い子供、ご年配の方が安全に通りを歩くことのできる環境をつくるのが、先人の紡いできた通りの作法を守ることにつながるのではないかと思います。

「通りの作法を守る」ために何ができるだろうか、ということを考えつつ、すぐにできることとして、自転車に乗っているときは速度を出しすぎず、「歩いている人の迷惑にならない」ということを意識して生活したいです。

優秀賞 碁盤の目の通りと京都文化

久御山町 池乃 大さん

小学生の頃、学校で「ま～るた～けえ～びす～に、お～しお～いけ～」と、京都の通り名の唄を覚えさせられた記憶があります。『マンガで知ろう！通りの復権と歩いて楽しいまち』の作中でもこの唄が使われており、懐かしくなりました。子供の頃は、四条通りや京極の商店街にいけばありとあらゆる物や娯楽、文化がありました。それがいつの間にか各地に大型スーパーができ、世の中が物であふれ、便利さの中で徐々に京都らしさが失われていったように思います。京都の特徴である碁盤の目の『通り』は、時代とともに次第に狭く、危険なものとなり、車社会においては利便性の悪い通過点として捉えられるようになりました。

かつて京都市内の『通り』は、京都人の生活を支え、府外の人にとっては京都の文化に触れられる、重要な役割を果たしていました。しかしいつの間にかそれは当たり前となり、私たちは『通り』の意味を忘れつつありました。私はこの漫画を読み、京都の通り名の唄の歌詞とともに、京都という町が日本の中でどのような意味を持つのかを再認識させられました。漫画では、『通り』の安全な通り方、使い方が紹介されていますが、私たちが本当に理解すべきは、それらを理解したうえでの、『通り』の活性化、文化の中心としての『通り』の復興です。

昨今では、街づくりの国際化と合理化が進められ、京都文化も府外、国外へ向けてのパフォーマンスとなっています。本当の文化とは何なのかと考えさせられます。私たちは『通りの復興』を実現し、文化というものを再構築していかなければならないでしょう。この漫画によって、府外、国外の人からも京都への理解が深まり、多くの期待がよせられることを願います。そのために私たちがまずすべきは、京都の『通り』を安全に美しい、子供からお年寄りまで皆に好かれる街にしていくことです。この漫画はそれをわかりやすく私たちに教えてくれます。

優秀賞 「通りの復権と歩いて楽しいまち」を読んで

京都市左京区 加藤 淳史さん

以前、日本各地の珍しい特徴を持った町を紹介するテレビ番組を見たことがある。その

中で京都、とりわけ中心部についてこんな紹介がされていた。

「京都の住所には通りの名が入っている。」

生まれも育ちも京都の自分にとっては普通のことであったが、言われてみれば確かに他地域ではあまり見かけない。

東西と南北、格子状に張り巡らされている京都の通りは、いわゆる「碁盤の目」と呼ばれ、昔から地域社会に深く関わってきた。

場所を示す際に使われるのはもちろん、通りを基に様々な文化が発展するなど、京都に住む者にとって「通り」とは、単なる道路ではなく地域社会を構成する大切な一員なのである。

「通りの復権と歩いて楽しいまち」では、その「通り」で起きている交通問題についてわかりやすく示してくれている。自転車編、自動車編、店舗看板編、再配達編の4つのテーマに分かれているが、私が特に印象に残ったのは自転車編である。

漫画では自転車がスピードを出したまま十字路に進入しようとし、おじいさんに制止される場面がある。ちょうど車も十字路に進入しようとしていたため危うくぶつかるところであったが、おじいさんのおかげで事故を免れている。だが、事実ではどうだろうか。

狭い道を猛スピードで走行したり、一時停止もせずに十字路へ進入したがゆえに、人や車とぶつかる事故が実際に起きている。信号無視やスマホを使いながらの運転、路上駐輪なども頻繁に見かけ、歩行者の安全を脅かしている。

道は本来、誰もが自由に使用できるものである。しかしながら、その「自由」を「好き勝手にしても良い」と捉えている人が多いのではないだろうか。

漫画内で男の子がこんなことを言っていた。「一人ひとりの少しの配慮でみんなが安全に通れる道ができる。」

この漫画を読んで私は、互いに思いやりの気持ちを持つことの大切さを改めて認識することができた。

優秀賞 少しの思いやりでみんなが歩いて楽しいまちに！

京都市中京区 竹内 彩香さん

「マンガで知ろう！通りの復権と歩いて楽しいまち」を読んで、初めに思い浮かんだのは、「すべての人」にとって、「歩いて楽しいまち」ってどんなまちだろう？ということである。

「すべての人」には、歩美ちゃんのおばあちゃんのような高齢者、歩美ちゃんのような子どもはもちろんのこと、ベビーカーを押すお父さん、お母さん、障害のある方など、配慮が必要な人も含まれる。

そして「歩いて楽しいまち」というのは、「安心して通れる安全な通り」であって、初めて「歩いて楽しい」という感情が生まれるのだと思う。

例えば、視覚障害のある人や車椅子を使用している人が、通りを通る際に、違法駐車や路上駐輪、置き看板が道を塞いでいたら、「安心して通れる安全な通り」とは言えない。視覚障害のある方は、車にぶつかって怪我をするかもしれないし、車椅子を使用している人は道幅が狭く通れず遠回りしたり、段差があればそれを乗り越え車道を通ったりしなくてはならなくなる。

以前、視覚障害のある方が毎朝通学のために通られる道によく路上駐輪がされており、しかも点字ブロックの上に駐輪されているため、危険で困っていると相談を受けたことを思い出した。その路上駐輪されている場所を詳しくお聞きすると、地下鉄駅の駐輪場の入り口付近だった。朝急いでいて、地下まで止めに行く時間がない、駐輪場代を払うのが嫌だから路上に止めてしまえ、という気持ちなのだろうか。路上駐輪をしている人は、きっと自分のことで精一杯で、その自分の行動が、視覚障害のある方を困らせることになっているとは気が付いていないのだろう。

みんなが相手の立場に立って、自分の行動を見つめ直し、少しの思いやりをもつことが、すべての人にとっての「歩いて楽しいまち」の実現への第一歩になるのではないだろうか。